

待降節第1主日 11月28日 分かち合い

ルカ 21-36

今日から、待降節、そして、教会暦の新しい年が始まります。待降節というと、まずは、クリスマスを迎える準備の時と考えますが、今日の典礼に関する限り、あまり、クリスマスの雰囲気を感じられません。むしろ、世の終わりに現れる恐ろしい現象、そして、「目を覚ましていなさい」という厳しい言葉が朗読にはあふれていました。

待降節、という言葉には、主の来臨(Advent)を待つという意味が込められています。そして、主の来臨には、神の子が人となってこの世に誕生される、文字通りのクリスマス(降誕)を意味すると同時に、復活された主イエス・キリストが、世の終わりに再び来られる、再臨される、という意味も含まれています。教会暦が終わりに近づくにつれ、そうした終末に関する言葉が度々出てきたことを思い出されるでしょう。

今日、待降節第一の主日では、この後の意味の主の来臨がテーマになっています。自然界の、想像を絶する異常な現象が次々に生じること、人間にとって、普段、意識せずに最も頼りにしている大地そのものが揺らぐ地震に象徴されるように、この地球、さらには、宇宙を含めた世界が異常をきたすとすれば、それは、現在世界中を恐怖に陥れたコロナウィルスの災禍以上に人々を動揺させるに違いありません。

しかし、聖書には、そうした世の終わりの現象だけでなく、もっと近い将来起こりうる、人々を恐怖に陥れる出来事についても記しています。それは、イスラエルの人々にとって、まさに、信仰の中心であるエルサレムの都、そこにそびえたつ神殿が崩壊することでした。そして、その前に、イエスに従っていった人々を失望のどん底に陥れたのは、あの愛する師であるイエスが、無残にも、十字架上で亡くなられたことです。

聖書は、そうしたことを記すことで、ただ人々に恐怖心を起こさせるわけではありません。むしろ、そのような出来事を通して訪れる希望について、語ろうとしているのです。ちょうど、寒く辛い冬を通して、温かく明るい春が訪れるように、人間が経験する、様々な厳しい現実を通して、神の恵み、命、希望が与えられることを教えるのです。

第一朗読のエレミヤの預言では、「わたしが、イスラエルの家とユダの家に恵みの約束を果たす日が来る」と預言者は語ります。エレミヤは、イスラエル王国が滅ぼされ、残されたユダ王国もバビロニアによって滅ぼされるという、悲惨な現実の中に生きた預言者です。彼は、訪れるはずのわざわいについてあからさまに王国貴族に訴え、回心をよびかけ、そのために様々な苦しみを味わった預言者です。そのエレミヤが、今や、神が与えようとなさる恵みの約束、救いの到来を、はばかりことなく語ります。神の恵み、救いの光は、闇の中ではじめて訪れることを彼は確信していたのです。

わたしたちが生きる現実、いつの時代も、そして、この21世紀の世界も、不完全で問題だらけ、人間の弱さや醜さが繰り返し露呈され、やりきれない思いにさせられることの連続と言っても大げさではありません。つい、投げやりになったり、やり場のない不満をうちに蓄え、何かのきっかけさえあれば爆発しかねない状況がどこにでもあるようにも思えます。

しかし、そのような、人間の力だけではどうにもならない、そんな状況だからこそ、神ご自身が人としてこの世にお生まれになり、そこで、人としての弱さ・無力さをとことん味わわれることによって、それを希望に変えるという、神の力、神の恵みをもたらし、人々に希望をもたらす光を注いでくださったことをわたしたちは信じているのです。

このクリスマスを迎えようとする待降節の間、聖パウロが勧めるように、「神に喜ばれるためにどのように歩むべきかを学び」、さらにその歩み続けることができるように、主の力強い導きを祈りましょう。(S.T.)